

古高ドイツ語および古ザクセン語における結果文

齋藤 治之

§1 序論

ドイツ語文法においては非人称熟語の代表的な例として①現象文、②存在文が挙げられることが多い¹。その中で、「現象文」においては生起する現象はふつう不定冠詞を伴って文中に置かれる。「dass 副文」も不定冠詞付の名詞句と同様に文中に現れる。以下、現象文の例を挙げると：

(1) Es ist ein Unfall geschehen.

“事故が起こった”

(2) Es kommen 20 Studenten.

“20人の大学生が来る”

(3) Es träumte mir, dass ich in der Luft flog.

“私は空を飛ぶ夢を見た”

(4) Es fiel mir auf, dass der Motor nicht in Ordnung war.

“私はエンジンが不調であることに気付いた”

(3)、(4)における es は「dass 副文」を先取りする仮主語ではなく、本来は「現象文」の非人称主語である。つまり、生起する現象は、統語的には主語であるが意味的には心理的述語 (psychologisches Prädikat)²として、また、(1)、(2)のように従属文以外は名詞句は通常不定冠詞を伴って文中に置かれる。この統語的主語と心理的・意味的述語の区別は結果文を考える上でも重要である。本稿では古高ドイツ語による Otfrids Evangelienbuch および古ザクセン語による

Heliand に現れるすべての結果文をその表す意味に基づいて分類し、結果文と主文の間の意味的關係およびゲルマン語における結果文の起源を探ることを目的としている。

§ 2 古高ドイツ語および古ザクセン語における結果文

1) 〈自然現象〉—主文が、人間の意志を超えた、自然的な現象を表すもの。

Otfrid (用例: S-26, I.11,25, I.14,1, I.23,2, II.3,12, II.7,44, II.12,60, II.14,63, II.14,68, II.17,7, III.4,1, III.4,18, III.7,49, III.20,18, IV.7,4, IV.12,9, IV.26,35, V.6,30,)

Bi thiū ward, thi ih nu sageta, thaz Joseph sih irburita (I.11,25)

(私が今述べたような理由で、ヨセフは出発した)

thiū salida ist uns wortan, thaz wir nan eigun funtan (II.7,44)

(幸運が我々に生じ、我々は(遂に)彼(イエス)を見出した)

Oba iz zi thiū wirdit, thaz thaz salz firwirdit (II.17,7)

(事態が至り、塩がその力を失うならば)

Thio ziti sih bibrantun, thaz oston tho nahtun (III.4,1)

(時が満ち、復活祭の季節が近づいた)

Ob iz war zi thiū gigat, thaz man thia diufi ni firstat (III.7,49)

(事態が進展し、人々がその深い意味を理解しないならば)

Heliand (用例: 152, 1799, 1968, 2411, 2868, 3471, 4367, 4878)

Thar mōses uuarð, brōdes te lēbu, that man birilos gilas tuelibi fulle (2868)³

(そこで食料(パン)について残りが生じ、人々は12の籠を一杯にして集めた)

antthaz is kindiski farcuman uuirdit, that ina after is iuguði godes anst manot blīði an is brioston (3471)

(彼の子供時代が過ぎ去り、その後、神の恩寵が彼にその胸のうちに於いて促

すまで)

Sô uuarð ôk that fiur kuman hêt fan himile, that thea hôhon burgi umbi Sodom land
suart logna bifeng grim endi grâdag, that thar nêinig gumono ginas biûtun Loth êno
(4367)

(天から熱い火が降って来て、ソドムの地のあたりの高い城を恐ろしい炎が捕え、そこではロトを除いて人々のうち誰も助からなかった)

2) 〈心理・生理的現象〉—主文が心理・生理的現象を表すもの。

Otfrid (用例: I.18,31, II.6,27, II.7,58, II.12,78, II.13,18, III.20,94, III.24,93, IV.7,32, V.10,25, V.23,281)

Ob uns in muat gigange, thaz unsih heim lange (I.18,31)

(我々の心に思いが浮かび、我々が故郷を懐かしむならば)

ward tho mennisgen we, thaz er nan uz thoh ni spe (II.6,27)

(人々にとり彼(アダム)がそれ(リンゴ)を吐き出さなかったことは災いであった)

wan, iz quami imo in sin muat, thaz er nan zalta so guat (II.7,58)

(彼の心に思いが生じ、彼(ナサニエル)は彼(イエス)のことをそのように好意的に語った)

Er scal wahsan thrato sines selbes dato, thaz minu werk suinen (II.13,18)

(彼(イエス)は自己の事柄(神性)によって栄えるであろう。その結果私(ヨハネ)の仕事は消え去るであろう)

Er habet ju thaz altar, thaz er in thesen thingon firsprechan mag sih selbon (III.20,94)

(彼はすでに年齢に達しており、その結果彼は自分自身でこれらの事柄において自ら責任を取ることが可能である)⁴

ward wola sie mit libe, thaz sie giboran wurtun (V.23,281)

(彼ら（主の愛すべき友）が生まれたことは彼らにとり良い事であった)

Heliand (用例：3, 1060, 1375, 1481, 2276, 2448, 2687, 2761, 4851, 4867)

Sô he ina thô gehungrean lêt, that ina bigan bi thero menniski môses lustean (1060)

(彼が飢えに身を任せ、人間の性質に従って食べ物を欲しがった時)

ef he im than lâtid is môd tuuehon, that hi ne uullea mid hlutro hugi te hebenríkea
spanen mid is sprâcu endi seggean spel godes (1375)

(もし彼が自分の気持ちを疑いに任せ、純粋な思いとともに、その言葉でもって、
人々を天の国に駆り立てそして神の福音を述べることを望まないならば)

uurðun underbadode, that sie under bac fellun (4851)

(彼らは驚き、後ろに倒れた)

Thô gibolgan uuarð snel suerdthegan Sîmon Petrus, ... , that he ni mahte ênig uuord
sprekan (4867)

(その時、勇士シモン・ペトロは腹を立て、...、一言も話すことができなかった)

3) 〈受動文〉—主文が受動文あるいはそれに相当するもの。

Otfrid (I.9,2, I.11,52, V.2,14,)

Tho ward irfullit thi u zit, thaz saliga thi u alta thaz kind tho beran scolta (I.9,2)

(時が満たされ、祝福されたその老婦人は子供を産むこととなった)

ist ira lob joh giwaht, thaz thu irrimen ni maht (I.11,52)

(彼女（マリア）の賞賛と讃美は（それほどなので）、あなたはそのすべてを語り
尽くすことはできない)

Heliand (用例：1081, 2053, 2524, 3636, 3662, 5908)

lêt ina thô lêdean thana liudscaðon, that he ina an Hierusalem te them godes uuîha,

alles obanuuardon up gisetta (1081)

(そして、彼(イエス)は人を損なう者(サタン)に自分自身を導かせ(=導かれ)、
サタンはイエスをイエルサレムの神殿の上へ置いた)

undar thi uirðid thero gumono hugi auuekid mid uuînu, that sie uuel blîðod (2053)

(そのようにしているうちに、人々の心はぶどう酒によって呼びさまされ、彼らは陽気になる)

Hôriad nu huô thie blindun, siður im gibôtid uuarð, that sie sunnun liot gesehen môstun, huô si thô dâdun (3662)

(目の見えない人々が、癒された後、どのようにして太陽の光を見ることができ、それからどのようなことをしたか聞きなさい)

4) 〈不定人称〉—主文に“人々”のような不定人称を表す語が現れるもの。

Otfrid (用例：II.11,30, V.6,44, V.6,71,)

In imo sahun se odowan gotes kraft scinan, thaz sie thar irforahtun (II.11,30)

(彼の中に恐らく人々は神の力が輝くのを見て、彼らは恐怖に襲われた)

Heliand (用例：4196, 4227, 5345)

imu all thi us uerold folgot, liudi bi them is lêrun, that uui imu lêðes uuiht for thesumu folcscepi gifrummien ni môtun (4196)

(これらのあらゆる世の人々が彼に、人々が彼の教えによって、従っており、我々は彼に、この群衆の前で、悪いことを何もすることができない)

habde ine thi smale thiod thurh is suôtiun uuord uuerodu biuuorpen, that ine thie uuiðersakon under themu folcscepi fâhen ne gidorstun (4227)

(人々が彼を、その快い言葉のために、群衆でもって取り囲んでおり、敵対者たちは群衆の間で彼を捕えることは敢えてしなかった)

Mi thi hebbiat thesa liudi fargeban, uuerod Iudeono, that ik giuualdan muot (5345)

(これらの人々は、ユダヤの人々は、あなたを私に任せ、私は決定を下すことができる)

5) 〈絶対的力〉—主文に運命のような“絶対的力”を表す語が現れるもの。

Otfrid (用例: I.10,23, II.14,120, V.12,25, V.16,41,)

Ginada sino warun, thaz wir nan harto ruwun (I.10,23)

(彼の慈悲はそれほどなので、彼は我々を哀れに思う)

nu uns thiu fruma irreimta, thaz er uns selbo zeinta (II.14,120)

(今や我々に幸運が生じ、彼自ら我々に教示を与える)

Waz wuntoro ist, thaz wolta, ther iamer leben scolta, er ingiang ungimerrit duron so bisperrit (V.12,25)

(何の不思議であろう、(その結果) いつまでも生きる運命にある者が、自ら望んで、妨げられることなく閉じられた戸から中に入った)

Thiu kraft ist iu gimeini, thaz nist unheili in worolti zi ware (V.16,41)

(その力は普遍的であり、実際この世に病気は存在しない)

Heliand (用例: 369, 762, 3349)

si thiu berhtun giscapu, Mariun gimanodun endi maht godes, that iru an them siða sunu ôdan uuarð (369)

(輝ける運命と神の力がマリアを催促し、彼女に旅の途中で息子が生まれた)

antthat uurd fornam Erodes thana cuning, that he forlêt eldeo barn (762)

(運命がヘロデをあの世へ奪い去り、彼が人々のもとを離れるまで)

ina is reganogiscapu gimanoda mahtiu suið, that he manno drôm ageban scolde (3349)

(運命が彼を力強く催促し、彼はこの世を去らなければならなかった)

6) 〈超越的存在〉— 主文に“神、聖霊、天使、サタン”のような超越的存在を表す語が現れるもの。

Otfrid (用例: II.1,21, II.3,52, II.5,16, III.1,13, III.7,32, IV.33,40, V.19,34, V.25,98)

er quam in inan, thaz man sah, tho ther fater zi imo sprah (II.3,52)

(それ(聖霊)は、父が彼に話しかけた時、彼の中に入り、(その結果)人々はそれを目にした)

Themo alten det er suazi, thaz er thaz obaz azi, gispuan, thaz er ouh thaz firliaz, thaz druhtin inan duan hiaz (II.5,16)

(その老人(アダム)を彼(サタン)はおだて、(その結果)彼はその果物を食べ、主が彼に行うように命じたことを怠るように唆した)

Er deta, thaz halze liafun joh stumme man ouh riafun (III,1,13)

(彼は(御業を)行い、(その結果)足の萎えた者達は走り、口のきけない者達は叫んだ)

thaz deta druhtin thar tho krist, thaz uns iz ofanaz ist (IV.33,40)

(そしてそのことを主は(明らかに)し、(その結果)それは我々にとり周知のことである)

Heliand (用例: 56, 428, 574, 682, 755, 769, 1037, 1047, 2588, 3352, 3481, 3598, 4894, 5166, 5311, 5798)

Than habda thuo drohtin god Rômanoliudeon farliuuan rikeo mēsta, habda them heriscipie herta gisterkid, that sia habdon bithuungana thiedo gihuilica (56)

(そして神はその時、ローマ人たちに国々の中で最大のものを授け、人々の心を元気づけ、彼らはあらゆる民族を征服した)

Thar im godes engil slâpandiun an naht suueban gitôgde, gidrog an drôme, al so it

drohtin self, uualdand uuelde, that im thûhte that man im mid uuordun gibudi (682)

(神の天使は、神自身が望んだように、夜眠っている彼らに夢を示し、彼らには人が彼らに言葉で命じているように思われた)

cumit im thiuhelpan fon gode, that im gilêstid thie gilôbo (3481)

(神の助けが彼にやって来て、信仰が彼に従う)

7) 〈相関的用法〉—主文の *so* を *thaz/that* による副文が受けるもの。

Otfrid (用例: I.20,36, I.22,3, I.22,53, I.27,57, III.20,6, III.20,62, III.20,90, III.24,22, IV.7,88, IV.13,32, IV.26,41, IV.26,42, IV.26,43)

Nu folget imo thuruh thaz githigini so managaz, thaz ther nist hiar im libe, ther thia zala irscribe (I.20,36)

(そのために今や非常に多くの群衆が彼に従い、(その結果) その数をすべて残さず数え上げる者はこの世には存在しない)

Heliand (用例: 311, 454, 1183, 2732, 5258)

Sô uuas iro uuîsa than, thero liudeo landsidu, that that ni môsta forlâtan negên idis undar Ebreon (454)

(彼らの、人々の土地の習慣はそのようなものであり、(その結果) ヘブライ人の女性の誰もそのことを怠ってはならなかった)

Thô uuârun im Kristes uuord sô uuirdig an thesaro uueroldi, that sie bi thes uuatares staðe iro aldan fader ênna forlêtun (1183)

(その時、彼らにはキリストの言葉がこの世においてあまりにも価値があったので、彼らは湖の岸に年老いた父を一人残した)

8) 〈その他〉—上記 1) ～ 7) 以外のもの。

Otfrid (用例 : I.1,108, I.3,20, I.7,24, I.10,12, I.23,49, II.14,33, IV.2,3, IV.6,6, IV.7,45, IV.12,41, IV.23,44, V.5,9, V.9,18, V.16,13)

wanta sie firbarun, thaz guatu werk ni barun (IV.6,6)

(というのは彼らは控え、その結果彼らは良き業を行わなかったからである)

Heliand (用例 : 68, 1814, 2404, 2483, 3205, 3394, 3580, 3723, 3799, 4875, 4902, 5216, 5648, 5707, 5795, 5950)

thar maht thu undar them kaflon nimen guldine scattos, that thu fargelden maht themu manne te gimôdea mînen endi thînen tinseo sô huilican (3205)

(あなたは鰓の下で金貨を手に入れることができ、その男が満足するように、私とあなたのそれぞれの税を払うことができます)

Thô gengun im thea gesiðos tô bittra gihugide, that sie uuið that barn godes, uurêða uuiðersakon uuordun sprâkun (3799)

(その時、その一団の人々は悪意に満ちてやって来て、神の子に言葉でもって話した)

slôg imu tegegnes an thene furiston fiund folmo crafto, that thô Malchus uuarð mâkeas eggjun, an thea suiðaron half suerdu gimâlod (4875)

((シモン・ペトロは) 一番前にいる敵に対して両手の力によって打ちつけ、マルクスは刃で体の右側に傷を受けた)

以上の 1) ～ 7) が、結果文の前に現れる主文の代表的な種類である。それではこれらの主文にはどのような共通する特徴があるのだろうか。以下この点に関して述べてみたい。

印欧諸語における通常の、つまり無標の語順は“主語—動詞—目的語”ある

いは“主語—目的詞—動詞”であるが、各言語はそれとは異なる語順を示す場合がある。ドイツ語におけるその代表的な例は民話などの語りの冒頭の部分である（例：ドイツ語 *Es war einmal ein König.*）。

ゲルマン諸語においても、通常とは異なる語順を示す次のような文が存在する：

古アイスランド語：*líða þau missere.*（この半年が過ぎて行く）⁵

古高ドイツ語：*argangana uuarun ahtu taga.*(*Tatian* 7,1)（八日が過ぎ去った）

古ザクセン語：*Uuarð thie hêlago dag Iudeono fargangan.* (*Heliand* 5765)

（ユダヤ人たちの聖なる日は過ぎ去った）

古高ドイツ語：*uuas giuuortan gotes uuort ubar Iohannem.* (*Tatian* 13,1)

（ヨハネの上に神の言葉が起こった）

これらの文に対応するものとして、現代ドイツ語では“漠然としたもの”を表す非人称の *es* を文頭に置いた *es vergeht* ～, *es geschieht* ～のような構文が存在する。このことから分かるように、上記例文の主語はある動作の主体（*Agens*）ではなく、動作の結果生じる事柄であり、この点において人を主語とした *Er geht* のような文とは明らかに異なっている。

従って、例えば *líða þau missere.* のような文は、“（年月が）過ぎ去り、その結果半年経った”と解釈することが可能である。このように上掲の例文は意味的に“動詞によって表される動作が起こり、その結果ある事柄が生じる”という意味的構造を有している。

非人称的な主文に続く結果文はゲルマン語以外の他の印欧諸語にも存在する。例えばラテン語には次のような文がある：*ēvenit ut nōn sit domī.*（彼はたまたま家に居ない）。このように、ラテン語では *fit*, *accidit*, *ēvenit* “～起こる”のような非人称動詞の後で、結果文を導く *ut* が現れ、これらの文は“ある動作

が起こり、その結果ある事柄が生じる” という構造を持っている。

以上のような *ut* による構文は *Otfrid* の *Bi thiū ward, thi ih nu sageta, thaz Joseph sih irburita* (I.11,25) (私が今述べたような理由で、ヨセフは出発した) と構造的に同じと考えることが可能である。さらに、*ut* による構文は *venit tempus ut ...* のような主文に主格が現れる構文へと発展するが⁶、これに対応するものとして例えば *Heliand* には次のような文が存在する：*thiū tīd uwas thuō genâhit, that hie eft te Hierusalem Iudeo liudeo wison welda* (3981)。(受難の)時が近づき、彼は再びエルサレムでユダヤの人々を教え導くことを望んだ)

このように、結果文は先行する非人称的な主文と密接な関わりがあることが分かるが、このことをさらに詳しく考察してみたい。

上述の自然現象の次に問題となるのは心理・生理現象である。心理・生理現象を表すためにゲルマン諸語では次のような構文が用いられる：

ゴート語：*kara ist mik* (私は心配だ)

古アイスランド語：*grunar mik* (私は疑う)

古高ドイツ語：*mir willôt* (私は～したい)

心理・生理現象は動作の主体が漠然としてはっきりと分からないために非人称構文によって表されることが普通であり、*Heliand* においても次のような心理・生理現象の表現が数多く見出される：

ina bigan mōses lustean (1060) (彼は食物を欲しがり始めた)

an them mi licod uuel (3149) (その者に対して私はとても好意を抱いている)

langode Iudeon, huan êr sia that hêlaga barn hangon gisâuuin (5372)

(ユダヤ人たちはその聖なる子が十字架にかけられるのを見ることまで望んだ)

Otfrid では Ob uns in muat gigange, thaz unsih heim lange (I.18,31) (我々の心に思いが浮かび、我々が故郷を懐かしむならば) および wan, iz quami imo in sin muat, thaz er nan zalta so guat (II.7,58) (彼の心に思いが生じ、彼 (ナサニエル) は彼 (イエス) のことをそのように好意的に語った) のように、主語を持たない (I.18,31)、あるいは非人称主語の主文が先行する (II.7,58) という結果文が見られるが、Heliand では uurðun underbadode, that sie under bac fellun (4851) (彼らは驚き、後ろに倒れた) および Thô gibelgan uuarð snel suerdthegan Sîmon Petrus, ... , that he ni mahte ênig uuord sprekan (4867) (その時、勇士シモン・ペトロは腹を立て、...、一言も話すことができなかった) のように主文に主語が現れる。

次に受動文についてであるが、これも心理・生理現象と同様のことが言える。受動文が用いられるのは、主に動作の主体をはっきり表さないことにより動作そのものに力点を置く場合、あるいは主体が漠然とした超越的なものではっきり分らない場合である。印欧語の中でも特に受動構文が多用される古アイルランド語では、〈自然現象〉、〈心理・生理現象〉など以外に、日常的な行為にも漠然とした超越的な力が働いているという考えのもとに、“Is andsin atbert indruid: denum comferta cofessamar ..., Dentar amlaid, ol Patraic (そして、そのドルイドは言った。「我々はともに奇跡を行おう。」「そのようになされる (=そうしよう)」とパトリックは答えた)” のような、相手の質問に対する返答における受動文の使用が観察される⁷。

古高ドイツ語 Otfrid および古ザクセン語 Heliand においてもそれぞれ次のような文が見られる：

Tho ward irfullit thiu zit, thaz saliga thiu alta thaz kind tho beran scolta (I.9,2)
(時が満たされ、祝福されたその老婦人は子供を産むこととなった)

undar thiū uuirðid thero gumono hugi auuekid mid uuīnu, that sie uuel blīðod (2053)
(そのようにしているうちに、人々の心はぶどう酒によって呼びさまされ、彼らは陽気になる)

〈運命〉、〈超越的存在〉に関する表現にも、何か漠然とした力が働くという考えから、〈自然現象〉、〈心理・生理現象〉などの表現と同様に、次のような非人称構文が用いられる。以下すべて古アイスランド語の例である：

mart berr nú fyrer augo mér ((何ものかが) 今や私の目の前に多くのものをもた
らす (= 今や私は多くの幻を見る))⁸

skilðe með ðeim ((何ものかが) 彼らの間を引き裂いた (= 彼らは離れ離れになっ
た))

sette hlátr at honom ((何ものかが) 彼に笑いを置いた (= 彼は笑わずにはいら
れなかった))

また、非人称表現にはギリシア語の $\tau\epsilon\delta' \alpha\gamma\alpha \Sigma\epsilon\upsilon\varsigma$ (Hom.M.25) (ゼウスが雨を降らせる) のように擬人化された神格をその現象を司るものとして捉え、主語として置く例も見られる⁹。これは、自然現象を表すものではないが、Otfried の *Ginada sino warun, thaz wir nan harto ruwun* (I.10,23) (彼の慈悲はそれほどなので、彼は我々を哀れに思う)、*nu uns thiū fruma irreimta, thaz er uns selbo zeinta* (II.14,120) (今や我々に幸運が生じ、彼自ら我々に教示を与える)、Heliand の *anthat uurd fornam Eroles thana cuning, that he forlêt eldeo barn* (762) のような *fruma* (幸運)、*Ginada* (慈悲)、擬人化された *uurd* (運命) と似通っている。

以上述べたように、that によって導かれる結果文の前には、〈自然現象〉、〈心理・生理現象〉などの非人称的な性格を持つ主文がよく現れることが分かる。非人称構文においては、ある特定の行為者が自分から主体的にある動作を行う

のではなく、動作の主体が漠然としていて、ある動作が行為者の働きかけなしに自然に生じることになる。そこで、結果文の出発点は“行為者としての主体がはっきりしない**自然発生的な動作**+その**動作の結果**”という図式にまとめることができる。

従来、結果文の起源については、Heliand の *Thô uuârun im Kristes uuord sô uuirdig an thesaro uueroldi, that sie bi thes uuatares staðe iro aldan fader ênna forlê-tun* (1183) (その時、彼らにはキリストの言葉がこの世においてあまりにも価値があったので、彼らは湖の岸に年老いた父を一人残した) のような、主文の *sô* と副文の接続詞 *that* の相関関係が存在する文を出発点とし、そこから *sô* を伴わない *slôg imu tegegnes an thene furiston fiund folmo crafto, that thô Malchus uuarð mâkeas eggjun, an thea suiðaron half suerdu gimâlod* (4875) ((シモン・ペトロは)一番前にいる敵に対して両手の力によって打ちつけ、マルクスは刃によって体の右側に傷を受けた) のような結果文が成立したと考えられている¹⁰⁾。しかし、7)〈相関的用法〉が Otfrid、Heliand 両作品において結果文の用例数全体から見てそれほど多くはなく、また、Otfrid では *so* は程度を表すが、Heliand では様態を表す例も多く見られる：

Nu folget imo thuruh thaz githigini so managaz, thaz ther nist hiar im libe, ther thia zala irscribe (I.20,36)

(そのために今や**非常に多くの**群衆が彼に従い、(その結果) その数をすべて残さず数え上げる者はこの世には存在しない)

Sô uuas iro uuîsa than, thero liudeo landsidu, that that ni môsta forlâtan negên idis undar Ebreon (454)

(彼らの、人々の土地の習慣は**そのようなもの**であり、(その結果) ヘブライ人の女性の誰もそのことを怠ってはならなかった)

以上のように、〈相関的用法〉は意味的に一元的ではなく、また、結果文が

ラテン語の *evenit ut nōn sit domī*.（彼はたまたま家に居ない）のように非人称的な主文の後によく現れるということから考えて、結果文の成立を〈相関的用法〉ではなく非人称の主文と結びつけて説明することも可能であると考えられる。

註

- 1 Duden, Die Grammatik P. 557f.
- 2 Heusler, Andreas, Altisländisches Elementarbuch, P.174.
- 3 この文に関しては、môses を部分の属格としてこれにさらに数量を表す主格を補う解釈も可能であるが、thô im thes uuînes brast (Heliand 2012) “その時、彼らにワインが尽きてしまった” のような brestan の非人称用法と並行する現象と考えると、非人称構文と捉えることも可能であると思われる。また、Behaghel も Heliand 2012 と 2868 の文を同じタイプの文としている。Behaghel, Syntax des Heliand, P.238.
- 4 Behaghel はこの文の thaz を結果文を導く接続詞と解釈し、それに対し Dal はこの thaz を名詞 altar の内容を説明するものとしている。
Behaghel, Otto, Deutsche Syntax Bd. III . P.141.
Dal, Ingerid, Kurze Deutsche Syntax, P.195.
- 5 Heusler, Andreas: Altisländisches Elementarbuch, P. 174.
- 6 Kühner, Raphael/Stegmann, Carl: Ausführliche Grammatik der lateinischen Sprache, P.56.
- 7 Hartmann, Hans, Das Passiv, P.28.
- 8 Heusler, Andreas, Altisländisches Elementarbuch, p.148. 以下同様。
- 9 高津春繁, 『印欧語比較文法』 p.320.
- 10 Dal, Ingerid, Kurze Deutsche Syntax, P.195.

I. 参考文献

- Behaghel, Otto: Deutsche Syntax Bd. III . Heidelberg 1928.
: Syntax des Heliand, Wiesbaden 1966.
- Dal, Ingerid: Kurze Deutsche Syntax (3. Aufl). Tübingen 1966.
- Duden, Die Grammatik Bd.4 (4.Aufl.) Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich 1989.
- Erdmann, Oskar: Untersuchung über die Syntax der Sprache Otfrids. Halle 1973; Nachdruck der Ausgabe 1874.
- Hartmann, Hans: Das Passiv, Heidelberg 1954.

Heusler, Andreas: Altisländisches Elementarbuch, Heidelberg 1932.

Kelle, Johann: Otfrids von Weissenburg Evangelienbuch Bd.3 Glossar 1963, Neudruck der Ausgabe 1881.

Kühner, Raphael/Stegmann, Carl: Ausführliche Grammatik der lateinischen Sprache (4.Aufl.) München 1962.

高津春繁:『印欧語比較文法』東京 1971.

II. テクスト

Heliand: Heliand und Genesis, hg. v. O. Behaghel. Altdeutsche Textbibliothek Nr.4.7. Auflage Tübingen 1958.

Otfrids Evangelienbuch, hg. v. O. Erdmann. 1. Auflage Halle 1882.